



2025年1月吉日

年頭のご挨拶

日本洋酒輸入協会
理事長 磯野太市郎

2025年の年頭に当たり、会員の皆様方に謹んで新春のお慶びを申し上げます。平素より、当協会の運営に格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、振り返りますと、去年は災害や異常気象の怖さを痛切に感じた一年でした。年明け早々の能登半島地震にはじまり、大きな災害が国内で発生し、世界のワイン生産などに見られるように、気候変動がいかに社会に大きな影響をもたらすか認識させられました。

一方で、2024年物流問題へ対応する「物流総合効率化法」及び「貨物自動車運送事業法」の改正法やアルコールと健康問題を主なテーマとする「健康に配慮した飲酒に関するガイドライン」など、酒類業界へ影響のある法令などの公布、発出があり、ターニングポイントとなる重要な年になるのではないかとの印象もあります。特に、アルコールと健康問題は、SDGsの目標にも関連する世界的に重要な共通テーマであり、これまでも増して十分に配慮していく必要があります。

さて、酒類業界の現状に目を向けますと、一昨年10月の果実酒の増税、円安、資材費用や輸送費の高騰が商品価格に影を落としており、輸入数量はこの5～6年で約15%減少し、対前年比でもマイナスですが、輸入金額は3割弱の大幅な増加となっており、複雑な国際情勢も絡み輸入品のコスト高は続くものと懸念されます。

しかしながら、ぶどう酒（2ℓ以下の容器入り）の昨年10月の累計輸入数量は対前年比でプラスとなるなど、輸入金額の上昇や輸入数量減少の流れは幾らか収まりつつあるような印象も受けます。また、コロナ禍の意識も薄れ、3,000万人を超える訪日外国人数のインバウンド需要もあり、外食産業の売上も対前年比で伸びていると聞き及んでおり、忘年会シーズンも昨年と比べ活況でした。

何よりも、皆様が新たな需要の掘り起こしを意識したイベントの開催や新商品の開発に意欲的に取り組まれており、このような弛まぬ努力と工夫が、少しずつではありますが状況の改善に繋がっているものと考えております。

いずれにしましても、輸入洋酒市場が長期低迷に陥ってしまうことのないよう、今後の推移を見守っていきたいと考えております。

1 1月の政府の月例経済報告の基調判断では、景気は一部に足踏みが残るものの、緩やかに回復し、先行きについては緩やかな回復が続くことが期待されるとのことです。厳しい政権運営の中補正予算が成立し、石破政権には速やかな景気回復を期待してやみません。

さて、本年の課題と抱負について、3点ほどお話しさせていただきます。

1点目は、税制改正関係です。昨今の輸入洋酒市場は、依然として厳しい状況にあります。輸入数量の一層の下振れが続いており、このため、現在実施されている税率改正後を見据えて、引き続き、関係当局などに果実酒の減税を要望してまいります。

2点目は、製造ロット番号削除問題です。商売の基本は消費者の皆様への信頼・信用であることは言うまでもありません。生産から消費までの過程を追跡することを可能とする製品ロット毎に付された同一の識別番号が意図的に削除された輸入品が流通しております。「製造ロット番号が削除等された酒類の流通は、消費者の酒類に対する信頼性に疑念を与える可能性があり望ましくない」旨の国税庁通達は発遣されているものの、法的拘束力が無いためこのような酒類の流通が後を絶ちません。引き続き、要望実現に向けて国税庁に働きかけてまいります。

3点目は、製品への純アルコール量の表記問題です。酒類業界としては、製品への純アルコール量の表示については、アルコール健康障害対策推進基本計画（第2期）での検討事項であり、議論を進めていくこととなります。焦点の一つは、ワインやウイスキーのようにシェアする製品にどのような表示をするかが、大きなポイントとなります。会員の皆様のご意見も踏まえ適切に対応してまいります。

そのほか、引き続き有機JAS認証に関する同等性の交渉状況など、会員の皆様にとって有用な情報を速やかに提供してまいります。

最後に、2025年は乙巳（きのとみ）です。「乙（きのと）」は未だ発展途上の状態を表し、「巳（み）」は植物が最大限まで成長した状態を意味します。この組み合わせは、これまでの努力や準備が実を結び始める時期を示唆していますが、すべての人が同じペースで結果を得られるわけではなく、辛抱強さが試される年にもなるということです。

輸入洋酒業界は決して楽観視できる状況にはなく、早々には結果が出ないかもしれませんが、焦らず粘り強く取り組みが結実されるよう、微力ながら努めていく所存です。

昨年同様ご支援等を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様の益々のご発展をご祈念申しあげまして、年頭の挨拶とさせていただきます。